

巻頭インタビュー

教師としての矜持を ～摩擦こそ進歩を生む～

【プロフィール】

1953年生まれ。1976年、第一生命保険相互会社入社。2010年、第一生命保険株式会社代表取締役社長。2020年、第一生命保険株式会社および第一生命ホールディングス株式会社取締役会長(現在)。日本経済団体連合会副会長。2019年より中央教育審議会会長を務める。

中央教育審議会 会長 わたなべ こういちろう
渡邊 光一郎



令和4年度埼玉教育第1号では、これからの日本の教育と教員研修の在り方について、中央教育審議会の会長である第一生命ホールディングス株式会社の渡邊光一郎会長にお話を伺いました。

—「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現～(答申)」が出されました。この答申に込めた思いをお聞かせください。

答申に込めた思いは3つあります。1つ目は「未来志向の教育改革」であること。すなわち Society5.0 時代に向けた人づくりをするということです。2つ目は「教育振興基本計画の理念を活かす」ということです。カギは「自立」「協働」「創造」にあります。これは令和という時代にふさわしい「調和」とをとるということです。令和を英語に訳すと beautiful harmony といいます。これは「歴史で培ってきた日本の教育の強さ」と「未来に向かって変わっていくもの」とを調和することです。3つ目は、「多様性と包摂の重要性」です。「ダイバーシティ&インクルージョン」ということですが、産学ともに中心に置くべき考え方なのではないかと思っています。

幼児教育から高等教育までを見据えてこの答申が生まれました。これは歴史的には大きな意義があると思っています。

令和においては「歴史から学ぶこと」と「未来から学ぶこと」の調和も大切です。歴史から見ても日本の教育は世界に冠たるものだと思っています。これは知・徳・体の一体的な教育から生まれてきた強さだと思います。しかし、コロナ禍によって教育界に限らず日本の弱点が明確になりました。それは ICT インフラ、DX 対応の遅れ、それとグローバル化への出遅れであると思っています。未来志向の教育改革の中で、コロナ禍で明らかになった弱点を補わなければなりません。それが ICT インフラの整備であり、GIGA スクール構想だと思います。

答申の重要な点として「二項対立の^{かんぜい}陥穽に陥らない」という指摘があります。歴史的に、変革が求められるときは二項対立がどうしても生まれやすくなります。それをどう克服していくかということもこの答申の中で言われていることです。具体的には個別最適な学びと協働的な学びですが、これは主体的・対話的であり、深い学びを導き出し、それがやがて「創造」につながっていきます。個別最適な学びでの主体性・協働的な学びでの対話、その二つがあり深い学びとなるのです。どちらか一方がよいとする二項対立ではないのです。

「個別最適な学び」というのは知育の面や認知能力の視点では非常に重要ですので、これからは ICT を活用して強化していかなければなりません。また、「協働的な学び」がこれまで果たしてきた役割は非常に大きいとも思っています。幼児段階では遊びという中で協働的な学びが見られ対話的で深い学びの基礎がつけられます。これらの学びを高等教育まで一体的に学ばせることにより、深い学びから創造性へと広げて行くことが大切だと思います。

「ダイバーシティ&インクルージョン」ですが、これは教育の中で主にセーフティネットとして語られることが多いです。多様性を認めて個性を磨き上げていくと、一方で必ずセーフティネットが必要になってきます。包摂を意味するインクルージョンという概念です。PISA ショックを御存知だと思いますが、第1次 PISA ショックは明らかに「ゆとり」の弊害だと思っています。情報化やグローバル化を目指さなければいけないタイミングでカリキュラムを3割程度カットしてしまいました。それによって公立から私立へ、学校から教育産業へという流れができてしまった。これを放置すると格差が広がってしまいます。GIGA スクール構想は、ICT や民間の力を借りてこの格差を埋めていくことだと思います。第2次 PISA ショックはなぜ起こったかという、コンピュータ使用型の調査の導入が原因の一つです。ICT インフラの遅れが、あたかも学力が落ちているかのように見えたのです。これにおいても GIGA スクール構想が大変重要視されるということだと思います。

今後の課題としては3つあります。1つ目は、統合型校務支援システムの充実ではないかと思います。特に市町村ごとの差が大きいと感じています。

2つ目は高校教育の改革です。高校進学率は98.8%に達し、高校の7割が普通科という状況に加えて、学校生活の満足度や学習意欲が低い等の課題があります。義務教育から大学へとつなげていく上で、高校教育の在り方が問われているのだと思います。入試改革という議論だけではなく、文理融合型のSTEAM教育や、ICTインフラの整備による情報教育の充実も必要であるため、今後の検討事項と考えています。

3つ目は「働き方改革」です。時代が変わるときにはどうしても新しいことを「上乗せする」という概念が強くなってしまう。そうすると負担感が出て来ます。このような中で働き方改革という、スクラップもある考え方が入ってくることはとても重要なことだと思います。35人学級や教科担任制、外部人材の配置、部活動の見直し、免許更新制、ICT環境整備、学力・学習状況調査のCBT化など、移行期には先生方にとっては負担になるかもしれません。しかし、いったん導入してしまえば格段に業務は改善していくと思います。この働き方改革が進まなければ、これからやろうとする教育改革や求められている教育ができなくなる恐れがあります。

－教員免許更新制の発展的解消ということで議論が進み、先日（令和4年2月25日）その廃止が閣議決定されました。今後における教員の研修や採用の在り方についてのお考えをお聞かせください。

Society5.0時代を生き抜く子供たちを育てていかなければなりません。それを担う教師自身がまず未来志向を持つ必要があると思います。教師は自ら学び続ける存在であり、だからこそ特別な公務員なのです。自らも未来志向を持ち、学び続けて、子供たちのよき伴走者であってほしいのです。

令和3年3月12日に文部科学大臣より、『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について』という諮問を受けましたが、その中でも教員免許の在り方・教員免許更新制の抜本的な見直しは優先的な課題であるため先行して議論を行いました。そこでの議論は教師の自立的な学びの姿の在り方やその実現に向けた課題など、より本質的なものとなりました。その全体像をとらえて一体的に審議内容をまとめていく中で、教員免許更新制については今後より優れた教師の学びの体系を指していく過程で発展的に解消させる方向性となったものです。昨年11月には「審議まとめ」を文部科学大臣に御報告し、国会での法改正を経て、7月に廃止される予定です。

（※編集注 インタビューは、令和4年3月15日に行われました。令和4年5月11日に改正法が成立しております。）



【「教師は魅力的な職業である」の発信を】

この教員免許更新制の発展的解消と相まって、来年4月からは研修の受講履歴の管理が義務化される予定ですが、これには抵抗感を持たれている方がいることも承知しています。しかし、学び続けるのが教師であり、教師の皆さんには、未来志向で自立的に学び続けてほしいのです。それをサポートするのがこの研修の受講履歴管理と考えていただければと思います。そして未来志向で自ら学ぶ教師をサポートする、皆さんのような教育センターの役割がますます重要になってくると思います。

新たな「研修受講履歴管理システム（仮称）」を構築して、皆さんのようなセンターや市町村の教育委員会と連携しながら取り組んでいくことが求められていると思います。さらに、そのシステムの構築という狭い意味だけでなく教員の採用や養成、研修全体の在り方までの体系全体を見直していく必要があります。現在、中教審の特別部会の下に「基本問題小委員会」をスタートさせ、専門的な議論を深め、夏頃までを目途に一定の結論を得よう取り組んでいます。

ここでの見直しを通して、「教師というのは魅力的な職業である」ということや「社会的に重要な役割を担っている」ということを発信していきたいと考えていますし、教師の皆さんにもそのような認識を高めていただきたいと思います。教師としての矜持をもっと持ってもらえるように、社会的に発信していきたいと考えています。

研修受講履歴管理システムの構築については、教職員支援機構と連携しながら他の都道府県のセンターに先駆けてモデルケースを示せるよう取り組んでいただけるとありがたいです。

－教員研修機関に期待をかけていただきありがとうございます。その他に教員研修機関が果たすべく役割や期待することがあればお聞かせください。

総合教育センターが教職員の「知の拠点」として役割を発揮することは今後ますます重要になってくると思います。中教審の教職課程の見直し議論の中では「理論と実践の往還」という言葉が出てきます。理論を構築するセンターと現場との連動性を持たせて事例を積み上げ、普遍化していくことで、好事例を循環させていくということです。

実は私自身も教育実習を行った経験があるのです。教育原理などの理論をいくら学習したとしても、実習に勝るものはありません。教育実習に見られるように、現場の実践の持つ意味は非常に大きなものがあると思います。その中に工夫事例や好事例があり、それらを共有させていくことが大切です。

企業においても、リスキリングやリカレント教育が非常に重要視されてきています。教育界でも新しいICTインフラの活用やGIGAスクール構想の実現には教師の皆さんのリスキリングが必要です。そこで、1つ目の期待としては、教師の皆さんにはリスキリングやリカレント教育の好循環に入っていただき、センターはそれを支えてほしいと思うのです。埼玉県では「ICT活用ガイド」を作成していると聞きました。大変素晴らしいことだと思います。こうしたことが新しい好循環を支える基盤になると思います。今後もぜひ磨き上げてください。2つ目は、変化の激しい時代には不可欠となる外部人材の活用を促進することです。特別免許状の見直しも行われる予定ですが、それらの対象となる方などに対する研修の強化を是非お願いしたいと思います。3つ目は、GIGAスクール構想における、学習や研修のエビデンスについて磨き上げてほしいと思います。

今回の見直しの中で、教職員支援機構と皆さんのセンターの役割がより高まったと思いますので、とても期待しています。



【仕事と学びの好循環を】

一渡邊会長は経団連副会長として、経団連の教育・大学改革推進委員長もされております。企業経営者としてこれからの日本の教育のあるべき姿をお考えでしょうか。

経団連と国公立大学のトップが直接対話して、様々な議論をする場として「産学協議会」というものがあります。そこでは産学の連携の中で、人への投資を増やして新しい時代の人材育成を進めていくことが必要であるとの考え方を打ち出しています。

また、経団連としては、今後重視すべき教育内容として「文理融合教育」「STEAM教育」「リベラルアーツ教育」「グローバル化に対応した大学教育」「企業家教育」「リカレント教育」などを提言しています。その上で、私が特に重視しているのは「人材育成と働き方や雇用変化の好循環生む」ことです。これはつまり、Society5.0 for SDGsで必要となるイノベーションの促進とエンゲージメントの向上であるということです。新しい時代においては、企業の働き方改革や雇用制度改革が必要であると同時に、新しい時代に対応する教

育、つまり Society5.0時代に求められる能力・資質を育てる教育が重要です。「学びと仕事の好循環」といわれるように、雇用と教育が一体となって新しい時代の人づくりを推進していくことが不可欠であり、教育だけでなく、企業も変わっていかなければなりません。

一渡邊会長の印象に残っている先生やこんな先生に教わりたかったということ、またどんな子供時代だったかをお聞かせください。

私は富士の裾野の静岡県側で小中学校を過ごし、高校は沼津東高校へ通っていました。小中高の校歌にいずれも富士山が入っており、富士を仰ぎながら通っていました。沼津東高校は元々、旧制沼津中学校として開校し、その母体は江原素六という幕臣がつくった沼津兵学校・静岡師範学校にまで遡ります。このような背景から沼津東高校は、旧制中学のような雰囲気がある時残っていました。井上靖や芹沢光治良、大岡信などが卒業生として講演に来てくれて、非常に刺激を受けたことを覚えています。その時は講演の内容がそんなに重要なことだとは思っていなかったのですが、あとから「こんなことを言われたな」とよく思い出します。特に井上靖の「わが母の記」の映画などを見ると自分の幼少期と重なることが多いです。まさしく富士の麓の揺籃（ようらん）期だったと思います。校歌にも「揺籃の庭」という歌詞が出てくるのですが、小中高のあの時代はまさに基礎をつくった揺籃の時代であったと感じます。

特に印象に残っている先生は、中学校の先生で、今でもお付き合いしています。静岡大学出身で、大学では剣道部の主将だったそうです。この方はとてもバイタリティに溢れ、新しいことを発想して、取り組まれていました。私はその時生徒会長もやっていたので、先生の行うことに「そんな無理なことやって」と内心思っていたのですが、先生が次々とこちらの能力以上のことを投げかけてくるので、とても大変でした。しかし、後から考えるとまさに揺籃期の思考方法や生き方に非常に影響を受けたように思います。中学校はオリンピックの刺激を受けてバレーボールをやっていました。



【皇居を望める21階の会議室から】

たが、その先生の影響で高校からは剣道部に入りました。ちなみに大学は空手部に入りました。文武両道の思考はこうした経験で養われたと思います。旧制中学の校風で、高校時代は1年中下駄を履いて登校していましたし、1年生のときは岬と岬の間を泳ぎ切る遠泳の授業もありました。2年生では志賀高原に行き、部活単位でパーティーを組んで毎日山登りをさせられました。文化系の部活はバスを使えるのですが、私たちのような体育会系は下から歩いて登らされました。余り勉強した覚えは無いのですが、そのような経験は非常に心に残っています。これは、集団的で協働的な学びだったと思います。みんなで何かに取り組んで、助け合いながら集団で学んだことは、後から振り返っても鮮明に心に残っているものです。

ー最後に、埼玉の幼小中高特別支援学校の先生方に、期待することやアドバイスがありましたら教えてください。

埼玉県教育振興基本計画を見させていただきましたが、とてもよくできていると思います。特に「豊かな学びで未来を拓く」というコンセプトの下に主体的に社会に関わるということ、多様な人々の交流を通じて学ぶこと、新たな価値を創造してつなげていこうとすること、これが明確になっていることは素晴らしいと思います。文部科学省のまとめた教育振興基本計画に準拠した形になっており、まさに自立・協働・創造につながるのだと思います。この方針に基づいて、新しい未来に向けた人づくりのために教師の皆さんの活躍を期待したいと思います。

しかし、働き方改革にもあるように、現実的には困難な状況が多々あると思います。そんな時、私はやはり教育原点にかえることが大切だと思っています。教育の原点というと米国の哲学者であるデューイの3大原則（3つの機能）を挙げたいと思います。それは「社会的統合」「平等主義」「人格的な発達」の3つです。多様な子供たちが学校で学ぶことによって、人間的共感を持って社会的存在としての実感を形成していくことが「社会的統合」です。これは言い換えると、協働的な学びのことだと思います。また、「平等主義」は、学校こそが不平等を是正するという考え方です。公教育を強化することの重要性を説いているのだと思います。格差問題が表面化するのは、公教育の弱さの表れなのです。最後の「人格的な発達」は、知的にも精神的にも道徳的にも発達させるのが教育の役割ということです。デューイがいう教育は「人間が人間として生き抜くことを最も鮮明に表す行為」なのだと思います。他の動物と違い、人間性ということは「学ぶこと」だと思います。教育によってそれが鮮明に表れるとデューイは言っているのです。これはまさに教育の

原点だと思います。

一人一人が置かれている子供の社会的な状況は違いますが、教育という活動を通して、進歩とか発展につながっていくことが教育の原点だと思います。

私の座右の銘は「変化は摩擦を生み、摩擦は進歩を生む」です。今のように時代が変わるときというのは間違いなく、摩擦を生むのです。摩擦があることによって進歩が生まれてくると思っています。最後になりますが、教職員の皆さんの今後の益々の御活躍を期待しています。



【憲法草案が検討された
マッカーサーの執務室】



【「変化は摩擦を生み、摩擦は進歩を生む」】